食の国際交流と豊かな食生活をめざして

日本通として知られ、ヨーロッパの生活も経験されて、文字通り国際的な味覚を持たれた元米国駐日大使・故ライシャワー博士は、「食の国際交流」が世界中の人々に豊かな食生活をもたらしていることを、当社に寄せたメッセージのなかで述べられています。そしてその例証として、日本人の食生活に欠かせない基礎調味料・しょうゆのアメリカ進出と成功を取り上げています。

また評論家の花田清輝は「真にナショナルなものは、実はインターナショナルである」と喝破しましたが、まさにしょうゆについて述べているかのようです。

このように一国の食文化が、世界各国の文化に融け込み、新しい食文化として芽生え、成長するとき、人々のより豊かな食生活が育まれるのです。

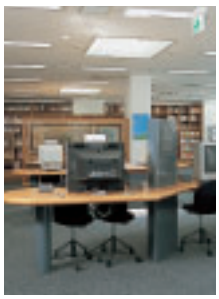
当センターの活動が、日本はもちろん世界の国々の食の歴史や食文化の紹介にとどまらず、「食の国際交流」と「食育」に少しでも寄与できるよう努めていきたいと思います。

キッコーマン国際食文化研究センター

閲覧コーナー

図書コーナー

キッコーマンの故郷―野田の町並みに調和した野田本社


メディアコーナー

企画展示コーナー

http://kiifc.kikkoman.co.jp/

キッコーマン国際食文化研究センター
〒278-8601　千葉県野田市野田250　TEL:04-7123-5215　FAX:04-7123-5218
<開館時間>午前10時～午後5時　<休館日>土・日曜日、祝日、年末・年始、ゴールデンウィーク、旧盆
※詳細は当センターへお問い合わせください。

表紙の解説

『七難七福図巻（福寿）』（円山応挙筆）

江戸期に武家が執り行う、本膳料理の調理場風景図。日本料理の源流とされる武家の本膳料理は、要人等を招き豪勢な饗応を繰返すことで、幕藩体制擁護や主従関係の秩序維持のために、武家に課せられた重要な儀礼であった。作者の応挙は、当時知遇を受けていた後援者からの依頼で『仁王経』の説に由来する「難福思想」を現世の物事を通して、天災を上巻、人災を中巻そして福寿を下巻に描く三巻からなる絵巻を、およそ三年の歳月を費やし明和五年（一七六八）頃に完成させた。

この表紙絵は、饗宴の様子（本誌十二頁下段の図）と共に同図巻の下巻「福寿」の部分に描かれているもの。

応挙は若い頃に京都で狩野派に学び、諸寺を歴訪し和漢名画の模写や山水・花鳥・人物などを写生。透視遠近法等の画法などにも習熟していた江戸中期の絵師で、円山派の開祖となる。代表作には、『七難七福図』や『雪松図屏風』等がある。（相国寺 所蔵）